

主 題：教会のあるべき姿 = 成長③

聖書箇所：エペソ人への手紙 4章7節

テーマ：聖書の教える教会のあるべき姿とは？

今朝、皆さんとともに見たいみことばはエペソ4:7です。今回は4:7-10を見るつもりで準備していたのですが、7節を学べば学ぶほど余りにもこの箇所が深く、また私たちにとって重要だったので、きょうはこの1節だけにしぼって考えていきたいと思います。聖書をお持ちの方はきょうのテキストであるエペソ4:7をお開きください。これまでの内容を思い出すためにも、まず1-7節をお読みしたいと思います。

エペソ4:1-7

「1 さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。:2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、:3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。:4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。:5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。:6 すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。:7 しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。」

さて、エペソを通してこれまでに学んできたことを振り返ってみると、パウロは救われた者がその召しにふさわしく一致を熱心に保つことが大切なのだとなりに教えてくれていました。教会として、神の家族としてさまざまな違いを持っている私たちがともに生きていこうとするならば、お互いが謙虚になって柔和な心を持ち、愛に基づいて忍耐を働かせ、平和を追い求めていくことが求められていました。主にあって新しくされ、一つとされた私たちにはどんなことをするのかよりも、どんな態度で、どんな心で互いに仕え合っていくのかが何よりも大事なことでした。

また、先週見た4-6節では、教会が一致を保っていく上で私たちがいつも覚えておくべき七つの要素、七つの共通点を見ることができました。確かに私たちは主にあって一つとされましたが、私たちのうちには異なる点が数多くあります。でも、それ以上に恵みによって、信仰によって、キリストによって救われた私たちは今同じ一つのからだを持ち、一つの御霊を持ち、一つの希望を持ち、一つの主を持ち、一つの信仰を持ち、一つのバプテスマを持ち、そして一つの父なる神を持って同じ一つの教会、神の家族として生きているのです。どんな人であろうとも、私たちはみな主にあって一つとされました。だからこそ主に喜ばれる教会として私たちが成長して行くためには、さまざまな違いに目を向け続けるのではなく、主が働いて与えてくださった共通点を覚え、同じ基盤に立って一心に一致を保っていくことが大切になるのです。

ここまで学んできたことを踏まえて、私たちは聖書の教える教会のあるべき姿にふさわしい者として日々成長しているのでしょうか？何度も言いますが、もし私たちが一つのものとしてとされているということをお忘れ、それぞれが好き勝手に生き始めてしまえば、それぞれが周りの兄弟姉妹と自分を比べて、自分の思いや自分のやり方こそが正解だと考え始めてしまえば、そこには確実に争いや不一致が生まれてきます。仕えることよりも仕えられることを望む者が集まる教会は必ずいつか分裂してしまうのです。私たちの主であるイエス・キリストは人に仕えられるためではなく、仕えるためにこの地上にいられた。この方の模範にならって生きていく私たちに与えられている責任は、お互いに仕え合うことを通じて一致を保っていくことなのです。

さて、そのことについて語ったパウロは7節から霊的賜物について話を始めていきます。7節に「しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。」とありました。ある人はこの「しかし」という接続詞を見て、パウロはこれまで一致の話をしてきたけれども、それはここで終わって、今度は別の話をしているのだろうかと思うかもしれません。皆さん、どう思います？もちろんそうではありません。パウロは一致の話を終えたわけではありませんでした。なぜなら7-8節で賜物についていろいろな説明を加えた後、12-13節で「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。」と記しているからです。パウロは一致の大切さについて変わらず教えていました。

これから私たちは霊的賜物についてパウロのことばから学んでいくのですが、その背後にはいつも私たちの一致が目的であるということ覚えておいてください。霊的賜物を与えられている目的は、私たちがそれを自分のためにではなく、神様と人とのために用いて、そのことを通して私たちが一致していくことにあるのです。ですから、もし私たちが霊的賜物を与えられている目的を忘れてしまえば、これもまた私たちの教会の中に分裂を生み出す原因になってしまうのです。一致を生み出すために与えられているものの存在意義を忘れてしまえば、分裂を引き起こすものになってしまいます。まさにコリントの教会の中に分裂を引き起こした一つの大きな問題こそ、この霊的賜物でした。そのことがIコリント12章と14章の中に記されていました。彼らは教会の徳を高め、ほかの兄弟たちの益となるために与えられた賜物を自分たちのために用いていました。人々は自分たちの持っている賜物を誇って、周りの人のことなどいっさい顧みずに好き勝手に異言で話したり、異言で祈ったりしていたのです。一緒に集って主に礼拝を捧げようとしても、ほかの人は異言で話している兄弟たちの言っていることが何一つ理解できませんでした。彼らは自分の徳を高めることに熱心になっていて、何の目的で賜物を与えられているのかを正しく理解していなかったのです。間違った理解が、本来一致を生み出すために与えられているはずの賜物によって、人々の間に争いや不一致が生み出されていました。

私たちが一致において成長していくためには、神様から与えられている霊的賜物に関して、まずひとりひとりが正しい理解を持つことです。そしてその正しい理解に従って、正しく賜物を用いることによって、私たちは一致を保っていくことができるのです。

### ○教会が成長するために：霊的賜物について押さえるべき四つの点

では、神様が私たちに与えてくださった霊的賜物とはそもそも一体どのようなものだったのでしょうか？みことばは一致をもたらすために、私たちに与えられた霊的賜物についてどのようなことを教えているのでしょうか？そのことをともにみことばから考えていきましょう。

きょう、私たちの見るこの7節には霊的賜物について最も基本的なことが記されています。特に私たちが霊的賜物を正しく理解する上で絶対に押さえておくべき四つのポイントをパウロは挙げています。私たちは絶対にこのことを理解していなければいけません。ですから、このみことばを通して一度主が私たちに与えてくださった賜物とは一体何なのか、またその真理に私たちがどのように正しく応答すべきなのかをひとりひとりよく考えてみてください。そして私たちひとりひとりがこの主の目的に忠実に、正しく霊的に賜物を用いて互いの間で一致をますます求めていく、そのような教会として成長していきましょう。

#### 1. 霊的賜物はすべてのクリスチャンに与えられたもの

さて、7節の最初に「しかし、私たちはひとりひとり……恵みを与えられました。」とあります。霊的賜物を正しく理解する上で押さえるべき一つのポイントは霊的賜物はすべてのクリスチャンに与えられたものだということです。言い換えれば、救われた者の中でこの霊的賜物を一つも持たない人は存在していないということです。霊的賜物というのは教会のリーダーや特別な人にだけ与えられたものではな

く、私たちひとりひとりみな手にしているものだということです。また特に、ここでパウロは「私たちはひとりひとり……恵み」が与えられたのだと述べていました。この「恵み」に関しては、後で詳しく触れますけれども、ここでパウロが言ったこの「恵み」は、救いの恵みではなく、キリストの体を立て上げる働きのための「恵み」を指しています。なぜそう言えるのかというと、1-3章の中で何度も何度も恵みによって救われるという真理を教えてきたパウロは、4章になって救われて教会に召された者がその召しにふさわしく歩んでいくために必要な「恵み」の力がひとりひとりに与えられたのだと記していたのです。パウロがここで言わんとしたことを、これまでのエペソの文脈を踏まえてまとめると言うことができます。救われたあなたたちは、確かにみな一つのものとして、同じ一つの神の家族として今を生かされている。でもそれはみながすべてにおいて全く同じということの意味しているわけではなく、ひとりひとりにはそれぞれキリストからさまざまな賜物が与えられ、キリストに仕えていくために必要な「恵み」の力が与えられているということです。

ここで皆さんに改めて覚えておいてほしいことは、聖書が教えている一致というのは、私たちがそれぞれの個性や性格を押し殺して、みんなが同じように考え、ふるまうような集まりになるということではありません。私たちが一致を目指していく時に、私たちは何も行動や話し方を全員同じ型にはめ込もうとするわけではないのです。教会における一致というものは、私たちが自分というものを失わずにさまざまな違いや役割が与えられている中で、同じ目的、同じ心、同じ福音に立って生きていくことです。本質においては一つとされた者たちが神様によって与えられたさまざまな賜物を発揮し、それぞれの役割を全うすることでキリストのからだをともに立て上げようとするのです。その責任はみんなが負っているものだというのです。

だからこそパウロはここで、「あなたたちはひとりひとり恵みを受けています」とは言わずに、「私たちはひとりひとり……恵み」を受けていますと言っていました。それは、教会を建て上げるという働き、それぞれに与えられた賜物を用いてキリストのために仕えていくという働きは、もちろんパウロも含まれているということです。彼は自分自身もキリストのからだを立て上げるという働きに召されていることをわかってはいたがゆえに、そのために熱心に仕えていました。そのことが同じエペソ3:7-9に「私は、神の力の働きにより、自分に与えられた神の恵みの賜物によって、この福音に仕える者とされました。すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に、この恵みが与えられたのは、私がキリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝え、また、万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現が何であるかを、明らかにするためです。」と記されています。パウロはこうして自分に与えられた賜物を大胆に用いて、主の栄光を現すために生きていました。そして、このパウロに与えられていた同じ「恵み」の力が今を生きる私たちひとりひとりにも与えられているのです。私にも皆さんひとりひとりにも、主によって新しく造り変えられた者であればすべての者に霊的賜物、「恵み」が与えられていると教えています。

だとすれば、少なくとも二つのことを私たちはよく考えなければいけません。一つは私たちは教会にあって、ひとりひとりそれぞれ特別な役割を担っているということです。私たちには主によって賜物が与えられ、ある人はその賜物が一つだけかもしれませんし、ある人は複数の賜物を持っているかもしれません。またある人の賜物は誰の目にもわかりやすいものかもしれませんし、またある人の賜物は誰にも気づかれないようなものかもしれません。また、たとえ今自分がどのような賜物を持っているのかわからなかったとしても、確実に言えることは、その人が本当に救われているのであれば、少なくとも一つ以上の賜物を主から与えられているということです。だからこそ私たちはみんな自分たちに与えられている賜物を用いて教会の中で貢献していくことができます。だれひとりとして自分は賜物を持っていないから教会の役に立つことなどできませんと言える人はいないということです。救われているのであれば、全員キリストによって賜物が与えられ、その賜物を用いて教会のために仕えていくことができるのです。私たちはみな自分に与えられた賜物を用いて、ほかの人にはできない特別な方法をもって教会

の成長にかかわっていくことができます。それゆえにそれぞれが与えられた賜物を主のために、教会の成長のために忠実に用いていくことが求められているのです。

皆さん、少し考えてみてください。なぜ私たちは教会に集まってくるのでしょうか？ただその場に行って、自分のためになる話を聞いたり、自分が望んでいるものを手にするためでしょうか？兄弟姉妹と交わりをして、ただ自分自身を満足させるためでしょうか？もし私たちが自分の益になることだけを求めているのだとすれば、先ほども言ったとおり、霊的賜物が与えられた目的を見失っています。私たちは主から与えられたそれぞれの賜物を自分のためではなく互いのために用いて仕え合い、主の栄光を現す者として成長するために召されているのです。ペテロも I ペテロ 4:10-11 で「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。」と、同じようなことを言っていました。私たちは同じ主にあって一つのからだに召されました。しかし、みんな同じではなく、私たちはそれぞれ神様から賜物が与えられ、それぞれ担っていくべき役割が与えられています。だからこそ私たちは賜物を働かせて、自分のことよりもほかの人の徳を高めることを熱心に追い求めていく必要があるのです。

私たちはひとりひとり教会にとって大切なのだということを覚えた時に、私たちが二つ目に考えるべきことは、教会にあって他の兄弟姉妹もそれぞれ特別な役割を担っているということです。私たちの歩みには必ず兄弟姉妹の助けが必要です。なぜなら私たちの周りの兄弟姉妹にも同じように神様から賜物が与えられ、自分とは異なる、彼らにしかできない形で教会の成長に貢献することができるのです。周りの兄弟姉妹にもそのような責任が、そのような働きがあります。だからこそ私たちがほかの兄弟姉妹のことを覚える時に、それがどのような人物であったとしても、だれひとりとして自分には必要ないと言うことはできません。もし私たちが周りの兄弟姉妹たちのことを見渡して、もし私は自分だけで大丈夫、自分にはあの人の助けなど必要ないと言うのであれば、それは大きな間違いだということです。そのことはパウロもはっきりとコリントの中で述べていました。I コリント 12:20-21 に「しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。」とあります。だれひとりほかの器官に向かって「あなたを必要としない」と言うことは絶対にできないのだと。でも、もし自分の方がうまくこなせるから、ほかの兄弟姉妹の助けなんて必要ない、自分のやり方を邪魔されて自分の思いどおりにできないのだったら、自分の気分が悪くなるから、ほかの人の助けは必要ないと、私たちのうちにこのような考え方があるのであれば、それは大きな間違いだとみことばは言います。主は自分たちだけでなく、救われているすべての兄弟姉妹にもそれぞれ特別に霊的賜物を与えられているのです。私たちがそれらを用いて仕え合い、互いの成長のために貢献する時にこそ一致が見られるのです。だれひとりとして自分だけで生きて行くことができる者はいません。そのような者のために主が十字架にかかってくださったわけではありません。私たちは神の家族として召され、それぞれが足りないところを補い合っていくことを通して、キリストのからだを立て上げていくのです。霊的賜物はすべてのクリスチャンに与えられ、教会にあってそれぞれ特別な役割が与えられています。私たちはこの賜物を互いの間で用い、一致において教会の成長を目指していくのです。

## 2. 霊的賜物は恵みとして与えられたもの

二つ目に言えることは、霊的賜物は恵みとして与えられたものということです。先ほども見ましたが、パウロは「私たちはひとりひとり……恵みを与えられました」と言っていました。この箇所に出てきている「恵み」は救いをもたらす恵みのことを言っているのではなく、キリストのからだを立て上げてい

く働きのための「恵み」を指しています。主に召された者がその召しにふさわしく歩んでいくのに必要になる「恵み」の力をキリストが与えてくださるのです。この奉仕のための「恵み」について、パウロはローマ12:6-8で「私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。」と述べていました。私たちはよく「恵み」ということばを使いますが、そもそも「恵み」とは一体何でしょう？「恵み」というのは、自分で手にしたものではなく、決してそれに値しない者に注がれる神様からの恩寵、ギフトです。そして私たちに与えられた最高のギフトは、まず何よりも私たちが罪と罪過の中に死んでいた時に、神様に逆らって自分の肉の欲の中に生きていた時に与えてくださった神様からの救いでした。それが私たちにとって神様からの最高のギフトでした。本来であれば生まれながらに御怒りを受け、自分の罪ゆえに永遠のさばきを地獄で受ける、それにしか値しなかった私たちが、神様は「恵み」でもって罪の赦しを与えてくださったのです。私たちが何をしたからでも、私たちが何者であったからでもなく、ただ神様があわれみ深い方であるからこそ、私たちに「恵み」を示して、私たちが贖い出してくださいました。そして「恵み」によって、私たちはさまざまな祝福が与えられただけではなく、神の家族へと召し入れられただけでなく、それに加えて私たちが主に仕えていくのに必要な「恵み」の力までも備えてくださったのです。主は「恵み」によって私たちに必要なものをすべて備えてくださった。霊的賜物が「恵み」として私たちに与えられたのだということを私たちが覚える時、これは自分たちの努力で勝ち取ったものではない、私たちがそもそもそれに値する価値ある人間ではなかったということが私たちのうちに思い起こされるのです。

だとすれば皆さん、これほどまでに感謝なことはないですよね？私たちに与えられている賜物を神様のために、またほかの兄弟姉妹のために喜んで用いていきたいと、そのようにならないでしょうか？

「恵み」の賜物が与えられ、主のために仕える者に私はなつたと口にしていたパウロは、エペソ3:8-9で「すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に、この恵みが与えられたのは、私がキリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝え、また、万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現が何であるかを、明らかにするためです。」と言っていました。「すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に」、パウロは自分がどれほど主の「恵み」に値しない存在なのかをよくわかっていました。だからこそ同じIコリント15:9の中で「私は使徒の中では最も小さい者であつて、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。」と記していました。彼は「神の教会を迫害した」自分のような存在が神様の赦しを得られるとは思っていませんでした。しかし、そんな自分に神様が「恵み」でもって赦しを与えてくださったこと、救いを与えてくださったこと、それだけではなくこの神を宣べ伝えるという働きに召してくださったこと、その「恵み」がいかに大きいものであるかを彼はよくわかっていました。だからこそそのことを心から感謝して、自分のすべてを捧げて主のために生きていこうとしていたのです。

問題は私たちがどのようにして自分の賜物を用いようとしているかです。私たちのうちにはだれひとりとして救いに値する者も、主の賜物に値する者もいませんでした。私たちはこの主のことを無視して、この主に逆らって生きていたのです。私たちに値したものはただ主のさばきでした。でもそんな私たちに主が一方的に「恵み」を注いでくださったのです。この「恵み」を心から感謝しているのであれば、自分自身がどれほど大きな「恵み」によって救われたのかを理解しているのであれば、その「恵み」に対する私たちの自然な応答は、主によって与えられた賜物を用いて、教会の成長のために互いに仕え合っていくことです。そして皆さん、私たちはそれに値しない者であったにもかかわらず、そのために「恵み」として賜物を受けたことをよく覚えておいてください。だとすれば、「恵み」が与えられた私たちはその同じ「恵み」をもって互いの間で仕え合うべきです。確かにさまざまな違いを持っている神様の家族の中で、自分とは意見や考えが合わないような人もいるでしょう。性格の違いがあつて、か

かわりを持つことがむずかしいような人もいるかもしれません。また自分自身は喜んで仕えようとしても、自分の願いどおりの反応を相手はしてくれないかもしれません。神の家族として生きていく上でいろいろなむずかしさがあります。でも、そのようなむずかしさに直面した時に、私たちはどのようにその相手に向き合っているのでしょうか？あの人には私の思いどおりにならないから、私が仕えるのには値しないとか、あの人の方がもっと謙虚になってさえくれれば、あの人が変わってさえくれれば私は喜んで仕えるのに、そう考えて仕えるのを拒んでいたり、距離を取っていたりしないのでしょうか？

私たちにとって最も容易なことは、自分に心を開いてくれる人だけとかかわり合いを持つことです。自分のことをわかってくれる人だけに仕えることです。自分と気が合う人物たち、自分に良くしてくれる人物だけを愛することは私たちにとって最も簡単なことです。自分を傷つけるような人や自分と異なる相手に対してあわれみを示すことに私たちはむずかしさを感じます。でももし私たちが「恵み」によって賜物が与えられているにもかかわらず、自分自身の基準に基づいて相手がそれに値するか値しないかといった判断をして仕えることは正しいことなのでしょうか？いや、むしろそれは私たち「恵み」で救われ、「恵み」で賜物が与えられた者が「恵み」を施していることに、「恵み」を分け与えていることになるのでしょうか？だれかが何かをしてくれたから、私たちはするのだとすれば、果たしてそれは「恵み」と言えるのでしょうか？私たちの主はそのような形で私たちを赦して下さったのでしょうか？そうではないですね？だからこそ私たちが「恵み」をもって互いに仕え合う時に、この人には仕えよう、この人には仕えないでおこうというような選択をする権利や資格は私たちのうちにはいっさいないということです。

本来であれば、私たちは罪ゆえに永遠のさばきを地獄で受けるような存在でした。そんなどうしようもなかった罪人に対して主は真っ先に「恵み」をもって希望を与えて下さったのです。そんな「恵み」で私たちは救われたのです。だからこそもし私たちがそのことをほかの人に示すのを拒むのであれば、私たちはよく考えなければいけません。仕えることがもし困難に思えるような場面に直面したのであれば、自分は「恵み」によって救われ、「恵み」によって今を生かされていること、主が十字架にかかって下さったのは何も私がそれに値したのではなく、主が「恵み」によってなして下さったのだということを私たちはよく覚えることです。そして「恵み」によって賜物が与えられたのだからこそ感謝して互いに仕え合っていこうと。こうして私たちは主から与えられた同じ「恵み」をもって、みずから喜んでどんな相手に対しても「恵み」を示していくのです。霊的賜物は「恵み」として与えられました。私たちはそのことに感謝して、あわれみを持って互いの間で与えられた賜物を用い、一致において教会の成長を目指していくのです。

### 3. 霊的賜物は適切な量で与えられたもの

霊的賜物を正しく理解する上で押さえるべき三つ目のポイントは、霊的賜物は適切な量で与えられたものだということです。7節は「しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。」と書いていました。「量りに従って」、ここで「量り」ということばが使われていますが、これは「計測器で測る」とか「測定する」ということ、またそこから「限りがある」とか「制限がある」といった意味を持ったことばです。ですから私たちに「量りに従って恵み」が与えられたということは、主が私たちに与えて下さったその霊的賜物には制限がある、言い換えれば私たちに与えられた賜物はそれぞれに必要な分だけが与えられていて制限なしにすべてを持っている人はいないということです。すべてのクリスチャンはさまざまな賜物の一つ以上持っています。でもだれひとりとしてそのすべてを持っているわけではありません。これは私たちにとってとても大切なことです。もし私たちのうちにすべての賜物が与えられていたとしたら、自分に必要なものがもうすでにすべて与えられているのだとすれば、私たちはほかの人の助けを必要としないわけです。そしてすべてのことを自分の力でなして

いこうとなるのです。なぜならすべて自分が持っているから、自分さえいれば何の問題もないのです。当然そこには一致などというものはあるはずありません。

そうならないために、キリストは「量りに従って」それぞれに必要な分だけ賜物を分け与え、意図的に制限を設けられたのです。だれも全部を持たないように、「キリストの量りに従って」それぞれに必要な分だけが与えられたということです。だからこそ私たちひとりひとりのうちには確かに欠けているところがあったとしても、そんな欠けている者同士がともに集って仕え合えば、その足りない部分を補い合うことができるのです。これこそがキリストが私たちに賜物を与えられた目的です。私たちは自分ひとりのために生きてるのではないのです。私たちが与えられた賜物をみんな持って、仕え合うことで一致を目指していくのです。私たちはひとりで生きていくために主によって召されたものではありません。ほかの兄弟姉妹の助けが絶対に必要不可欠な者として召されています。

パウロはここで用いられている「量り」ということばを使って、ローマ12:3-5でも「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってははいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」と語っています。ここでパウロは「すべての器官が同じ働きはしない」と語っていました。要するに、私たちキリストのからだの中で全く同じ役割を担っている人はいないということです。私たちはそれぞれに働きが違ふ、そんな一つ一つの器官として一つのからだを形成しています。だからこそ私たちはだれかの代わりにはなれないし、またほかの人も私たちの代わりになることはできません。私たちはそれぞれみんな違うのです。これまでにこんなことばを口にしたり、耳にしたことはないでしょうか？私の代わりはほかにもたくさんいるからできる人がやればいい、私がやらなくてもほかの人がやれば同じことでしょうと。みことばが教えていることは、あなたの代わりはほかにはいないということです。主は「恵み」によって、あなただけに特別な賜物を必要な分だけ与えられました。その賜物を用いて仕え合うことです。だから私たちはほかの兄弟を要らないと言うこともできないし、私は何の賜物も持っていないから仕えることもしません、そんなことも言えないのです。みなそれぞれ神様から与えられたものを用いて仕え合っていくことが求められています。

確かに私たちひとりひとりには限られているものです。しかし、そんな欠けた者たちが集まって互いの足りない部分を補い合うのであれば、私たちは教会として一致において成長していくことができます。もちろん私たちが互いに仕え合っていく時には、それぞれ謙遜であることが求められます。私たちが互いに仕え合おうとする時に、もし私たちのうちに自分にはほかの人よりもすぐれたものがあるのだとか、自分はほかの人よりもすぐれた者だとか、自分の方がいろいろなことができるといったようなプライドがあるのであれば、間違いなくそこには一致ではなく、争いや不一致が生まれてしまいます。だからこそ私たちは思うべき限度を超えて高慢になるのではなく、慎み深くへりくだって互いの必要を満たしていくことが大切になるのです。霊的賜物は私たちに適切な量で与えられました。私たちはその意図を覚えて、互いの足りない部分を仕え合って、補い合うことで一致において教会の成長を目指していくのです。

#### 4. 霊的賜物はキリストによって与えられたもの

霊的賜物がクリスチャンすべてに与えられ、「恵み」として与えられ、「量り」によって測られ、適切な量が与えられている。それだけでなく最後四つ目は、霊的賜物はキリストによって与えられたものだという事です。7節をもう一度見てください。「しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。」と書いてありました。私たちは来週、きょうの続きである8-10節を見たいと思います。そこで私たちはこのキリストによって賜物が与えられたということのすばらしさに

ついてより詳しく見る事ができればと思っています。ただきょう7節のこの箇所を通してよく覚えていてほしいことは、霊的賜物がキリストご自身によって私たちに与えられたのだということです。私たちが霊的賜物を持っているのはキリストが私たちにそれを与えてくださったからです。これがどうして大切なのかというと、私たちは私たちのことを一つも知らないような者から賜物を受けたのでもなく、私たちと同じような罪に汚れた者から賜物を受けたのでもないからです。私たちを私たち以上に知っていてくださり、罪も汚れも欠けたところもないキリストによって、私たちは特別に賜物が与えられました。だからこそ私たちの今持っている賜物は欠けているところもなければ、私たちにとって最善のものだということです。

だとすれば、私たちは時にほかの人の持っている賜物と自分のものを比べてうらやましく思ったり、自分にはないものを持っている人に対してその人物をねたんでしまうといった誘惑に駆られることがあるかもしれません。私もあんなふうになりたかったとか、あの人が持っている賜物を自分が持ってさえいればもっとすばらしい働きができたのにとか、どうして神様はこんな賜物を自分には与えてくださらなかったのだろうと。もしそのような思いが心を支配しそうになったら覚えなさい。主はキリストのからだを成長させるために最善の賜物を皆さんひとりひとりに与えてくださったということです。私たちがどう考えるとか、私たちの目にどのように映るかではありません。主がその知恵によって私たちに与えてくださったのであれば、それはもう私たちにとって十分に必要な物だということです。その必要な物を、その十分な物を互いの間で用いることです。私たちはいくらでも自分の得ていない物に目を向けて不満を口にする事はできます。でもそれは主の恵みや主のすばらしい知恵を否定することになるのです。キリストがあなたのためと思って与えたものに対して、いや、私はこれは欲しくなかった、あっちの方が欲しかったというようなことはあってはならないのです。キリストによって与えられているのであれば、正しい応答は、この主によって与えられた賜物に感謝して、何の目的でそれが与えられているのかを覚えて、実際に互いの間で用いることです。主よ、感謝します、あなたは私に必要なものを与えてくれました、私にはこれで十分ですと。あなたが私に与えてくださったこの賜物を用いてほかの兄弟姉妹を助けていくことができます。だからどうか私のなすべきすべてのことを通して主の栄光が現されますようにと。

霊的賜物はキリストによって私たちに与えられました。この方が私たちにとって最善の賜物をそれぞれ特別に選んでくださったのです。私たちはその応答として、この方の栄光を現すために与えられた賜物を用いて仕え合い、一致において教会の成長を目指していくことです。

## 〇まとめ

さて、今朝、私たちは霊的賜物を正しく理解する上で絶対に押さえるべき四つのポイントを見てきました。霊的賜物はすべてのクリスチャンに、「恵み」として、ひとりひとり最も適切な量で、キリストによって与えられたものでした。そして、主によって救われた者はみなこの与えられた賜物を用いて互いに仕え合っていくことが求められていました。もしまだイエス・キリストを自分の救い主、主人としてすべてを捧げて生きておられない方がおられるのであれば、きょう自分の罪を心から悔い改めて、この方に従う人生を始めてください。きょうのみことばでも見たように、生まれながらの私たちはみな神に逆らって歩み、そして私たちに値したものはただ神様からの永遠のさばきでした。きよく正しい主の存在など気にもとめず神様に逆らって自分の望むままを今生きているのであれば、その者に待っているのは神様からの厳しいさばきだけです。必ずその日はやって来ます。必ずひとりひとりが主の前に立ってその行いに報いを受ける日がやって来ます。しかし、そんなさばきにしか値しなかった私たちのようなこんな愚かな者をイエス・キリストはその愛ゆえにみずから進んで十字架にかかり、私たちの罪を赦してくださいました。私たちが何かをしたからではありません。私たちに値しない物を主が一方向的に「恵み」でもって与えてくださったのです。ですからこの主があな十字架でなしてくださったことを自分の



こととしてよく考えてください。そしてこの主を受け入れて、この主のためにきょうを生きていく、そのような人生をきょう始めてください。主は心を砕かれて、主の元に来る者を喜んであわれみを示してください。そんなすばらしいお方です。

また、きょうこの主を愛し、この主のために生きておられる皆さん、私たちにはすばらしい救いが「恵み」によって与えられました。でもそれだけではありません。私たちには「恵み」によってこの主に仕えていくために必要な「恵み」の力が与えられ、霊的賜物が与えられたのです。私たちは主にあつて一つとされました。同じ基盤に立って、同じ神の家族として生きているのです。しかし、一つとされたキリストのからだにあつて、教会にあつて、それぞれが特別でそれぞれに異なる働きが与えられています。私たちはそれぞれそのように賜物を受けたのです。だとすれば、私たちの責任はその私たちに与えられた賜物を用いて自分たちに与えられた役割を忠実に果たして行くことです。私たちはひとりで生きていくことはできません。ほかの兄弟姉妹に助けを求めながら生きていくことです。兄弟姉妹が互いの間で仕え合っていくのであれば、私たちが互いに足りない部分を補い合っていくのであれば、それを通してともに一致を保つことができます。仕えられることよりも仕えることを求め続けることです。そしてそのことを通してますます主に喜ばれる教会として成長していきましょう。